第五回　平成十六年二月二十五日

【発表】

加賀佳子「津軽家上屋敷における芸能上演と、津軽家の人々・客の関係」（二）

前回の発表では、1から4まで挙げました問題点のうち、3、客の格について、また客として来ている人々の身分、出自などを信政との関係から申し上げました。

今回は4の、年次による上演演目の増減の原因という問題を中心に申し上げて、1の殿様の出欠と上演、2の女性客の来る日と奥様の出欠にもふれたいと思います。前回はお客、今回は津軽家の内部の人間の関係ということになります。

『弘前大学国史研究』二三号の、これはきちんとした執筆者名がありませんで、メモのようなところに「宮崎」とあるのですが、その「津軽信政年譜」を参考にさせていただきました。そして、『弘前市史』通史2、資料2と『徳川諸家系譜』第一・第二を参照致しました。それ以外は見ておりませんので、これから調べていかなくてはいけないところも多いと思います。よろしくご教授下さい。

まず資料の「上演目的・時間表」を御覧下さい。武井先生が翻刻されています『弘前藩庁日記』寛文十三年からなのですが、これ以前に津軽家で何が起こったかということに関しては、前回の資料の「津軽信政略年譜」の方でカバーしております。

信政は、正保三年に弘前城で誕生、母の久祥院は側室というほどの身分でもない奥女中だったようです。慶安三年に参府し、以降はずっと江戸にいます。明暦元年に父の信義が上屋敷で亡くなって家督をつぎ、十三歳の時に従五位下越中守、寛文元年に十六歳で入部します。そして、四年に正室である不卯姫と結婚。七年には長男が生まれたのですが、数日後に死んでしまいます。母は正室です。九年に次の藩主となる事実上の長男、平蔵が江戸中屋敷で誕生しています。これも母は同じく正室不卯姫です。さらに十二年には後に那須家に入る次男主殿が生まれています。そして、寛文十三年＝延宝元年から江戸日記本文抄の記述が始まるということになります。

資料の方にお戻り下さい。延宝元年、当主信政二十八歳、若殿平蔵が五歳、与一（主殿）が二歳です。泉光院が七十二歳、七沢が八十一歳という年です。それで、三月九日に参府、四月十四日平蔵と不卯姫が将軍に謁しています。その前に平蔵は寛文十年、十二年にも世子として拝謁しています。五月十七日、歌舞伎の最初の記事で、能登守の公用上洛による集まりがあったのですが、能登守様の御内室のお支度か何かで延びてしまって、十八日になってしまったということがありました。そのあと、五月二十九日に正室の不卯姫が死んでいるのですね。つまり、この時点で「主婦」が死んでしまうわけです。ですから、十一月八日の記事から出てくる桂林院様が事実上の「主婦」ということになるのでしょうか。そして、十二月五日は泉光院邸で操を上演しています。

泉光院については、前回の資料1の系図を見ていただきたいのですが、夫が七沢雲晴でその間の娘が不卯姫という説と、先夫との息子正利の娘、つまり孫にあたるのが不卯姫という説があります。この泉光院の邸で上演があるので、若殿の平蔵が出かけて行ったわけです。泉光院邸は「柳営婦女伝」によると田安御門内代官町鼠穴ではなかろうかということです。こうして延宝元年については三回の上演記事が見られます。五月から十一月までとんでいるのは、不卯

姫が亡くなったからかなと思います。

延宝二年は上演記事がないのですが、六月二十一日に帰国しまして、生母久祥院を訪問しています。久祥院は別に御殿があって、そこに住んでいます。八月六日に大風雨で被害が出て、十二月十五日に当年不作。翌延宝三年に上演記事が十二月十一日の一回しかないのは、こうした事情によるのかもしれません。

この三年、日記方への御定が出ていて、それをあまり守っていないということは前回の発表で申しました。そして、三月十五日に発駕して参府しています。また、六月二十四日に素行が赦免になっています。そして、十二月十一日に「島原」の演目が行われて、嫡母である桂林院とその娘、信政の妹にあたる能登守の妻で、頻繁にお見えになるのですが、この母子と、他に八名の客があって、この時、お部屋様も見物しています。

延宝四年は二月三日に操があって、能登守振舞でかなりパブリックな催しでした。次の二月十二日には、能登守の妻子や桂林院など内輪の集まりというか、文化人もかなり来ているのですが、この時にもお部屋様が見物に来ています。

それから、三月十三日に系譜を近衛家に上呈というのがありまして、このあたりから津軽家は系図を近衛家で操作をしてもらっているらしいのですね。五月十三日に帰国して、翌延宝五年三月十六日に参府します。そして、五月五日に系図が確定したという知らせが近衛家より来まして、今大路出羽守が下向し、津軽家を近衛家の別家と称するということがありました。これは資料編の中の年譜に載っておりまして、ここで系図の操作が行われて、それで不卯姫があっちに行ったりこっちに行ったりしているのかなと思うのですが、そうしたことに関する記述は残っておりません。近衛家に系図のことを頼んだのは、もともと津軽家の祖先が近衛家の家司か何かを名乗っているからで、かなり荒唐無稽の話なのですが、別家を名乗るにあたって、近衛家の方に津軽家から金品が行っているようです。

延宝六年は上演の記録がありませんで、一月十九日には駿河台火消役になっていまして、六月九日に帰国しています。延宝七年になりまして、三月九日に参府しています。五月七日、十三日と催しがあって、それにお部屋様が見物に来ています。五月二十九日には例の火事の記事があって、これは津軽家が火事になったのではなくて、火消しのお手伝いなのですが、前年に駿河台火消役になったりしているので、何か関係があったのかもしれません。十二月一日に近衛家にて調製の系図が江戸邸に届きます。系図関係の資料などもいろいろあって、それ自体に齟齬があったりもするのですが、こういう動きがあったらしいです。

延宝八年になりまして、二月一日に系図のお礼として近衛家へ白銀百枚他を差し上げています。二月九日に歌舞伎の上演記事がありまして、たくさんのお客様がお出でになり、お部屋様、御隠居様（桂林院様）も見物しています。三月十一日も歌舞伎、これは内輪の催しだったようです。この年は上演が多くて、十六日に大奥女中をお招きして、公式らしい感じですが、「御前様」という形で殿様が出ています。そして、四月十六日にも内輪らしい見物事があります。この年、七月二日、信政と世子（平蔵）が、将軍家綱の遺物を拝領しています。五月八日に家綱が死んでいるので、その形見のようなものでしょうか。八月二十一日に世子が信重と改名しています。閏八月二十二日に世子が家綱に拝すとあるのですが、これは誤植で、綱吉に拝謁したのだろうと思います。そして九月一日に帰国の為の覚書を家内に出しまして、二十七日に帰国します。この年は平穏無

事だったようです。

次に移りまして、天和なのですが、天和元年から元禄二年まで、ずっと上演記事がありません。これは武井先生がいつもおっしゃっていますように、この間はないものなのだということです。禁制だとか火事だとかいろいろあって、どこの大名屋敷でも上演記事が残っていないようです。

天和元年三月三日に参府しまして、翌年五月二十一日に帰国しています。そしてこの年十一月二十二日には七沢雲晴が九十歳で死んでいます。十二月二十八日には例のお七火事があって江戸中大焼けということになります。天和三年は三月七日に参府しまして、五月一日、次男主殿を那須家に養子に入れます。貞享元年三月三十一日に帰国しまして、十二月二十五日に世子が正式に叙爵しまして、従五位下出羽守になっています。本当だったら、このあたりで何か催しがあってもよさそうなのですが、残っていません。

貞享二年、五月九日に参府しまして、七月九日には平蔵が婚約します。これが後に中屋敷奥様と呼ばれる御新造様です。そして、九月二十六日に素行が死んでいます。三年四月には桂林院が没しています。

四年になりまして三月十八日に参府。六月二十日には泉光院が亡くなりました。八月二十六日に、那須家に入った与一（主殿）ですが、御家騒動がありまして、所領没収の上、弘前へ蟄居ということになります。津軽本家としても、それに連座したということで、十月十四日に閉門になります。元禄元年の四月十七日に閉門は御赦免になって、七月二十八日に本所二ツ目に邸地を賜って御屋敷替えになります。十二月に平蔵が元服していますが、前年から津軽家には大変なことが続いていたので、お祝い等は延期になったのではないかと思います。この年はお国にも帰れませんで、ずっと江戸にいるわけですが、さらに翌元禄二年七月二十三日から十二月二十七日までの、親戚の出奔による逼塞という災難も重なります。元禄元年に亡くなっていた黒石津軽の伊織が後嗣がないために采地千石が召し上げられ、うち五百石が信政に預けられるということがありました。津軽家としては領地が少し減ったということになります。

元禄三年になりまして、二月十一日に操を行いまして、結構たくさんのお客様を呼んでいます。四月二日には佐竹修理大夫を招いて、大々的な催しをしていまして、この頃からやっと津軽家も上向きになってきたのだろうかと思います。五月十九日にも操をしていて、この頃までは上演の支払いもすぐに済ませています。後の方になると支払いが遅れるということもあるのですが、この頃は上演後、ちゃんと払っているという感じです。そして、八月十八日にやっとお国元に帰れるということになります。

ところが、その次の年、元禄四年になるとまた上演記事がなくて、何かあったのだろうかと思います。三月十五日に参府して、八月十二日には本所火消役になったりなど。そして十二月十一日に世子平蔵がやっと結婚します。けれどもお祝いの催しに関しては、日記には何も記録がありません。

そして、元禄五年一月九日に歌舞伎がありまして、若殿が結婚した御新造様を連れて、御年始にいらっしゃっています。御新造様は翌年から中屋敷奥様と呼ばれるようになります。この時、後で申しますが「御袋様」も来ています。三月十八日にも見物事がありまして、若殿夫妻もいらしています。この年は国元で四月四日に信政の生母久祥院が亡くなっています。八月十六日に帰国しています。

元禄六年は三月十三日に参府をして、五月四日から見物事の準備

に取りかかるということになりますが、その五月十日の見物には中屋敷奥様も呼ばれています。五月二十一日も歌舞伎がありました。この日のメインは信政の姉と中屋敷の奥様です。そして、十一月十八日には操があって、十二月十八日には次郎三郎小山常有に、オットセイの肉を下賜するということが見えています。

元禄七年、二月十一日と、二十日には次の準備が行われていて、これは二十一日の、中屋敷奥様が出産後、赤子幸姫を連れて初めての入来ということでの催しです。二月十五日に綱吉の講談を拝聞するということもあるのですが、前回も申しましたが、これのお祝いは三月十一日に行っています。御講談拝聞祝儀ということで、若殿の妻も来ています。殿様は五月十二日に帰国されています。

元禄八年には、二月八日に江戸の大火がありまして、一説に四万七千四百軒を焼いたそうです。三月十八日に殿様が参府します。そして、六月十一日に参府後初めて殿様の姉清昌院と妹長寿院が来て、見物事が催されています。この時、不思議なのですが、当主信政は「大殿」と表記されます。そして平蔵の妻である中屋敷奥様と、他に「奥様」と、「大奥様」という人が出てきます。「大奥様」はおそらく先程のお部屋様だと思います。あるいは、いろいろ表記が混乱した結果、奥様が複数になってしまった。日記方が各部署から集まってきたペーパーの齟齬をそのままにして書いたのかもしれません。

八月十四日には磐麻呂様が誕生という記事が日記に出ています。実際に生まれたのは七月二十八日です。そして、九月一日にお国元が凶作で倹約令が出ています。二十三日にはその凶作を幕府に報告しています。このあたりから財政難になってきまして、暇を出される者が出始めます。十月七日、知行米の削減、十九日には藩士の禄の半減、町医・職人二百人に暇という大リストラが行われています。主に下級の藩士がリストラされているようです。十一月三日に幕府から、凶作の見舞いとして、米三万俵分に相当する八千両を貸してもらっています。そして、十二月にまた軽格の者数十人に暇が出されています。さらに悪いことは重なるもので、十二月二十六日、上邸が類焼しています。この年は、元禄飢饉と呼ばれ、津軽だけでなく東北・北陸地方が大飢饉で、凶作による餓死者が三万人余という記録が残っているそうです。リストラについてですが、『市史』の数字によると、元禄八年段階で藩士総計一九三〇人のうち、五四・九パーセント、半分強が暇を出されているそうです。

元禄九年には疫病が流行して多くの死者が出て、餓死者も多数、さらに盗賊も横行するという状況が国表にありまして、四月、五月にも藩士に暇が出されています。殿様は六月二日に帰国して、そして、八月にはさらにリストラが行われます。こういう事情ですので、この年の催し事はちょっと無理かなというように思います。

次に移りまして、元禄十年ですが、二月二十日、前年の十一月三日に幕府から借用していた八千両のうち、二八〇〇両を返納しています。リストラの効果で財政が上向きになったのかもしれません。三月十九日に参府し、そして五月二十一日に見物事が催されました。若殿の妻、中屋敷奥様がいらっしゃいまして、若殿自身も来ています。この時は祈祷があったらしいのですが、何のための祈祷かはよくわかりません。十一月二十三日、あまり大きなものではないのですが見物事があります。

十一年になりまして、十二月十八日に鳴物停止が御免になっているのですが、その前の六月十六日に殿様は帰国しています。六月二十三日には、召し上げられて信政預かりになっていた五百石が黒石

の采女に戻されたようです。九月六日には例の勅額火事がありまして、中邸が類焼しています。この年は五月六月七月と洪水などが続きます。経済状況が厳しくなったのでしょうか、見物事の記事はありません。

元禄十二年になりまして、五月三日に狂言師の儀法度によって歌舞伎上演の予定を操に変更しまして、その準備が十日に行われまして、十一日に催されます。若殿様御夫妻他二十四名というように、結構大がかりに行われました。二十一日にも同じように見物事が催されています。どちらの記事でも殿様は「屋形様」と表記されています。そろそろ若殿様に見習いをさせ始めたのかなと推測されます。十月一日に次の準備をしまして、二日に見物事を催しました。この年は三月十三日に参府していまして、見物事も三回あって、よく行われた方ではないかと思います。六月十八日に世子が初帰国というのがありまして、殿様の表記が「屋形様」に変わったこの年あたりから、やはり若殿が殿様の代理を務めるようなこともし始めたのかなと思います。

そして、元禄十三年になりまして、一月二十三日に歌舞伎の予約を入れます。その準備が二回ほどあって、二月二日に催されました。もう一度、三月十一日にも見物事が行われます。この間若殿は帰国中で、奥様は出席しています。四月二十日に家光の五十回忌で、五月八日には家綱の二十一回忌で、それぞれ大赦があって、次男の那須与一の蟄居が許されます。そして、五月二十日には信政と若殿と与一が三人揃って将軍に謁しました。そして、九月一日に世子が土佐守と改称していますので、いよいよ政権委譲のような形になるのでしょうか。九月二十一日に帰国しました。

元禄十四年ですが、二十八日には孫の磐麻呂の読書始があります。八歳です。このあと、信政に御目見得して儒者はお抱えになっています。これについては前回申し上げました。三月十四日には浅野長矩の切腹の事件がありました。十二月一日に与一が綱吉にもう一度謁していて、そして二十一日見物事がありますが、これに関しては委細別帳とあって、具体的な記述はほとんどなかったと思います。そして、二十四日、あるいは二十九日に与一が千石を賜って旗本になります。

次の元禄十五年ですが、この年も飢饉だったらしいのですね。三月六日に一応見物事が行われておりまして、若殿夫婦と磐麻呂様が来ていて、この時も殿様は「屋形様」という表記で出て来ます。「大奥様」から見物事の希望が出されて、行われたようです。そして六月七日に帰国しまして、さらに七月十九日に国表で施我鬼が行われます。

以上のように、催しの増減に関しては、津軽家の内部事情、国表の収穫高、天災などがかなり反映されているのではないかと思われます。

武井：江戸の屋敷で歌舞伎とか浄瑠璃が上演される時は、必ずお殿様がいるのですか。

加賀：原則としましては、お殿様が御参府中でない時には行われていません。ただ、殿様がいないから記事にならなかったのか、それとも殿様がいない時には行われなかったのか、はっきりとはわかりませんが、殿様が江戸にいない時には記事は出て来ません。

武井：僕がよく引くのは『好色一代女』で、一代女が大名の妾にな

って、殿様の留守中は浅草のお屋敷で役者を呼んで遊び暮らしたと書いてあるのね。あれはフィクションだけど。そうすると、殿様が留守だからといって、やらなかったと言えるのかなと疑問に思うのですね。奥様の命令で上演するということもあったようだし。でも、殿様がいない時には上演記事は出て来ないよね。記録がないのか、どちらだろう。

加賀：殿様が出席していたのかどうか、江戸にいても出席はしないことがあったのかもしれません。はっきり殿様が出席していることが確認できるのは記事の半分ぐらいです。

武井：記録そのものが殿様のことを中心に記すという性格があるから、江戸を留守にしている間の歌舞伎上演は記録されないということかもしれませんね。

加賀：上屋敷の記録だけですけど、中屋敷とかで上演した可能性も除外できないわけですよね。女性達だけとかで行われても不思議ではないです。

林：お殿様が帰国していると、家来の数も少ないですよね。だから、いろいろな規模があって、能登守とかが来たりする時には一大イベントという感じで多くの人が働いているけれども、そうでなければ人手もそれほどいらなかったのではないかと思います。留守居役と江戸詰の家臣はどのぐらいいたのでしょうか。それぐらいの規模で上演できるのかできないのかも考えてみる必要があると思います。

加賀：元禄後半になってくると、催し事も大きい物とは限らないですね。家の中で、家臣達と一緒に、数名の文化人を呼んで行うというケースが増えているようです。このあたりから津軽家の財政難が始まって、津軽家だけではなくて金銭の遣り繰りに四苦八苦し始める時期ですよね。

残っている資料3「津軽家の女性」について、お話したいと思います。津軽家の女性達の見物事への出席に関してです。女性はまず殿様の正室不卯姫、この人は寛文十三年に死んでしまって、以降は主婦が不在ということになります。信政の嫡母にあたる桂林院様、これは延宝五年から御隠居様と表記されるのですが、大体は桂林院様が主婦の代理というような形で出ているのではないかと思います。この人は貞享三年四月二十七日に死去しています。それから、不卯姫の生母だか祖母だかにあたる泉光院は貞享四年に死んでいます。久祥院様は国表にいるということがはっきりしていますので、問題ではないわけです。

信政には正室不卯姫との間にもうけた子供達の他に、寿世という子がいます。寿世は黒石の養子に入るのですね。その寿世の生母である側室がお部屋様と呼ばれる人なのではないかと思います。他にも側室がいたようなので、この人と確定はできないのですが、とにかく「御部屋様」という表記が延宝頃から出だします。一応、同一人物であるとして、資料の方にまとめました。お部屋様の出席は延宝三年からこれだけの回数があって、桂林院はその倍ぐらい出席しています。桂林院様が出ていない時にはお部屋様は出ていないということは言えると思います。特にパブリックな見物事にはお部屋様は出ていなかったようです。

そして、系図のやりとりをした近衛家の『基熙公記』の貞享三年二月八日条に「今度平産」と出ていて、これを境に、「御部屋様」という表記はなくなりまして、「御袋様」となります。ですから、お産をしたお部屋様が御袋様になったのではないか、そしてこれが寿世の生母であろうかと推測を重ねれば、可能性としては言えるかもしれません。ただし、御袋様になってからは最初のうち、催しには出ておりませんで、平蔵の正室が元禄五年、六年と出席していますが、この間も御袋様は出ていません。

それから、「大奥様」、「奥様」という表記が突然出てくるのですね。ですが、大奥様や奥様にあたる人はいないわけです。不卯姫もいないし、桂林院もいないのですね。では、御袋様が奥様になったのだろうかとも考えたのですが、大名家のしきたりとして側室を正室に直したりするのだろうかと疑問にも思うわけです。とにかく、平蔵正室である中屋敷奥様以外に、奥様という表記が出てきて、この人が結構出席しているのですね。元禄七年、八年と出続けます。日記方の不備かもしれないと思うのですが。

【ディスカッション】

武井：大奥様と奥様が同一人物とは考えられないのですか。

加賀：どうでしょうか。「大奥様」、「中屋敷奥様」というふうに出てくる場合と、それ以外に「奥様」と出てくる場合があります。元禄八年六月十一日に「奥様」が見物しているのですが、磐麻呂が生まれたのが七月二十八日ですので、この時は中屋敷奥様は臨月のはずです。そのような時に見物はしないのではないかと思います。中屋敷奥様から菓子を下賜したという記事が出て来るので、お菓子を出しただけで、本人は出席していないのではないかと思います。

武井：出産前でも出席するのではないかな。自然のことという感覚があるだろうから。でも、大名家だったら大事にしたかな。

加賀：「大奥様」の方も帷子を政右衛門に下賜した記事しか出ないのです。ですから、ここの「奥様」というのは「大奥様」のことではないかと思うのですが、よくわかりません。大奥様は出席していたのだと思います。

武井：不卯姫が泉光院の娘なのか孫なのかという話ですが、たとえば結婚前におばあちゃんのところに養女に入るというような、格式の問題で、そういう話は出てきませんか。

加賀：出て来ないです。でも、おそらくそれだろうと思うんです。つまり、『柳営婦女伝』が享保六年ぐらいの成立かと言われていますが、泉光院の先夫というのは御法度の鶴を捕ってしまって罪人になっていて、その先夫が亡くなった後、江戸に帰ってきて、もと町人か何かの七沢と結婚したという話が載っています。系図の改竄をするにしても、わけのわからない夫から生まれたというよりは、七沢との間の娘とした方がよかったので移したのかもしれません。でも、泉光院の先夫との間の娘は実は家綱を生んでいますし、どちらがよかったかはよくわからないですね。娘のお楽が家綱を生んでから、俄然泉光院一家というのは日が当たって、

大名に取り立てられるということになったようです。『柳営婦女伝』もどこまで信用していいのかよくわかりません。『御定書』の系図も不卯姫を泉光院の孫としているので、おそらくそれでよいのだと思います。

泉光院の子供というのは、先夫の間にお楽、つまり宝樹院、そして増山正利がいて、七沢との間に那須資弥、長政、不卯姫、増山正弥がいたということになっています。

武井：家綱から見たら祖母に当たるのだから、かなり大きいですよね。

加賀：それから泉光院の妹の孫が綱吉の側室になって、徳松と鶴姫をもうけています。

渡辺：近衛家の系図をもらうとかいうことに関して、延宝七、八年ぐらいは大名家が公家との結び付きを強める時期だと言えると思います。系図だけではなくて、公家との付き合いを始めるのですね。日野家と伊達家とか、前田家もそうです。津軽家が特に媚びたということではなくて、大きな流れの中の一つではないかと思います。

加賀：津軽家が出自が卑しかったので、格付けが特に欲しかったのかなと考えたのですが。

渡辺：公家と結び付こうとしているのは、それほど珍しいことではないと思います。

林：大和守の二番目の奥様も公家の養女になっていますよね。これはどうも国元の側室だった人なのではないかと思われます。

渡辺：参勤交代が前提ですよね。国元に帰る時期というのは決まってる話ですよね。一年ぐらい前に幕命として通達が出ていたと思います。

武井：この頃の大名は自分の本拠地は、国元か江戸かどちらだと思っていたのでしょうか。

青木：国元に帰ると自分より偉い人はいなくなるからというのはあるみたいですね。ただ大名同士の友達付き合いとかは江戸でしかできないですよね。

林：正室の嫡男として生まれて家督している場合は、十代ぐらいになって初めて国元へ帰るわけだから、全然知らない所なんですよね。もちろん、国元から家来が来ているわけだけれども、江戸育ちの子供としてはいろいろ不安もあったでしょうね。言葉などは藩邸の中ではある程度使われていたとしても、気候風土などはほとんど異国という感覚だったのではないでしょうか。逆に側室の子供が江戸に出て来た場合とは少し違うかもしれませんね。

渡辺：寛文十三年十二月五日の記事で、若殿が五歳でお芝居の時に呼ばれているようですね。こういう時の演目は子供向けだったりするのですか。

加賀：どうでしょうか。

渡辺：メインの客は若殿なのですよね。若殿が行くというのはどういう意味を持っているのでしょうか。

加賀：従兄弟とか、他にも子供が来ています。

渡辺：それに力点を置くのであれば、やはり子供向けの内容というか、子供もおもしろいと思えたということなのでしょうか。

武井：おそらく、五歳ぐらいでも楽しめたのではないでしょうか。人形がチャンバラをやったりするのを見るだけでも、娯楽の少ない時ですし。

渡辺：歌舞伎というのはお茶会と同じようなレセプションみたいに思っている面と、子供も集めて一家団欒のようにするのと、様相が分かれているような気がします。そういう違いが出てくるのかなと思います。

加賀：問題として、招待客の格と演目との関係も考えたのですが、よくわかりません。ただ、内輪でやっているなという時と、政治的な意味も持った正式なものと、分かれている印象はありますね。でも、具体的に演目などにもそれが関係したのかどうかは難しいです。基準をどこに置けばよいのかわからないのですね。

林：歌舞伎だから、こういう性格の催しということは言えないのではないかと思いますね。浄瑠璃に比べれば歌舞伎の方がインフォーマルということはあるかもしれません。「大和守日記」では日待ちとかの場合は歌舞伎が多いようです。インフォーマルさも、家臣が呼んで殿様も見ているとか、もう少し外からお客を呼んでいたりとか、女性客ばかりとか、いろいろあります。歌舞伎だからということよりも、この客だったら歌舞伎でもいけるとか、歌舞伎を見たい客がいるとか、そういうように考えた方がよいのではないかと思います。泉光院邸に孫が呼ばれたという十二月の記事も、操があったというだけで、具体的な内容はわからないのですが、社交儀礼的な面もあったような感じですね。

渡辺：季節とかは関係ないですか。

武井：統計を取ってみたことが確かあって、多少はあったような気がします。上演記事が多い時期というのがあったように思います。

渡辺：参府の何ヶ月後というのが一つのパターンみたいですよね。

林：参府とか、帰国前の暇乞いとかはわりと多いですね。そういう時は兄弟や従兄弟とかが中心に呼ばれているようです。どうも、「大和守日記」を見ていると、しかるべきところには帰国前とかに断りを言って回ってるみたいですね。

武井：演目の中にも参勤の祝いとか、そういうものが入ってくるんですよ。芸人の方がそういう祝い事を取り込んで芝居を仕組んでいるということもあったようです。

加賀：演目を見てみると、御祝儀は御祝儀らしいものを選んでやってますよね。

武井：我々の考える演劇というのは、台本が決まっていて、どこに行っても同じようにやるというものだけれども、世阿弥でも、貴人の前でやる場合、遠国田舎でやる場合とかは、気にしますでしょう。ですから、客筋というのに合わせるという気持ちは、ものすごくあっただろうと思います。

加賀：津軽家の場合だと、十日前後、二十日前後というのが多いような気がします。

武井：月が偏っているのはあるようだけど、日はどうかな。

渡辺：昔の人は日の感覚というのはそれほどないのではないでしょうか。

武井：江戸城に詰める日とかとは関係があるのかもしれませんね。

林：元禄期に鶴姫が紀州家に行くのですが、三日にあげず政右衛門一座が来ている時期があるのですね。あれはこうやって見てくると、例外的なことなのかなと思います。

武井：「日乗上人日記」でもかなり頻繁に出て来ますよね。

加賀：このお客が来ているから、それに合わせた演目になっているということは確認できていないと思います。

林：あったかもしれないけど、演目の内容まではなかなかわからないですよね。

武井：題名しかわからないですからね。

渡辺：上演するのは時代物だけですか。濡れ事とかもやったのでしょうか。

林：島原狂言をやっていますね。

武井：元禄八年、餓死者三万人とか、江戸の大火で四万七千軒焼失とか、こういう数字はどういうことなのでしょうか。統計とか取ってたのでしょうか。

青木：村方には来ますね。飢饉があると少し落ち着いてから、何人死んだか書き上げさせたようです。村方の人口を把握していたと思います。

加賀：国表の事情が上演を考える上で無視できないなというのは改めて感じました。

青木：北東北は四年に一度だったかな、飢饉が来ると言われています。

渡辺：北東北は政策で徹底して米を植えているから飢饉が来るんですね。福島なんかは芋を植えるから飢饉が少ないようです。米が取れることを誇りにしていた部分があるのではないでしょうか。幕府の政策としては意図的だったようです。

青木：社会史の方で、米を神聖視していったことが言われていますね。

加賀：石高というのは米だけですか。

青木：畑にもつきます。一説では畑から取れるものを米と引き替えた場合、どれぐらいになるかで換算していたと言われています。林とかにも石高がつくんです。

渡辺：津軽は大変なところだったようですね。

操：浄瑠璃、人形
歌：歌舞伎、軽業など
①：操・歌それぞれの記事の通しNo（上演、報酬）

◎：目的
○：客
●：上演時間（刻表示は時表示に換算）
1：絵通しNO.

上演目的・時間表　『弘前藩庁日記』寛文13年５月17日～元禄15年３月６

才五回
（平成16.2.25）

寛文13 （延宝１） 1673 当主28歳 若殿5歳 手一2才 泉光院 72才 七沢 51才	5／17 歌①　1 ◎能登守、5月23日公用上洛による ○能登守母、妻、妻の母、他、男女内輪の客。８名。 ※上演予定日５月18日、延引	11／8 歌②　2 ◎慰事 ○桂林院母子、外孫、他、内輪の客、13名 ●朝五ツ前カ～夜五ツ過ぎ	12／5　3 操① ※泉光院邸での上演 ●若殿、朝五ツ過ぎに屋敷を出発 ・七沢雲晴	田舎御門内 代官町屋敷カ	3/9　参府	3/16 在子・落胤人、（不明姫） 将軍に謁す ＊K10，K12にも，謁	5/29 不明姫，没		
延宝２ 1674	6/21　帰国 久世院訪問	9/6　大風雨，大破宮	12/15　当年不作						
延宝３ 1675 当30歳 若7歳	12／11 歌③島原　4 ◎？ ○桂林院母子等、内輪の女性客と、男の客。８名。←お部屋様（見物） ●朝五ツ半時分～夜五ツ半		1/晦 日記文への定（4.15.12.8の資料3）	3/15　参府 ・奏答御覧	6/26 山底素行，赦免				
延宝４ 1676 当31歳 若8歳	2／3　5 操② ◎能登守振舞 ○能登守、久世出雲守他、大名、武家等。約16名。 ●朝八ツ過ぎ～夜五ツ過ぎ	2／12　6 操③ ◎馳走 ○能登守の妻子、左京の妻子、桂林院他、文化人等約16名。←お部屋様（見物） ●朝五ツ過ぎ（客入来）以降～？	2／15　7 操④（報酬）		3/3 系譜を近衛家へ上呈	5/13　帰国			

延宝5 1677 当32歳 若9歳	9／16 8 操⑤ ◎馳走（振舞） ○当主他、大奥女中、武家、僧侶、文化人等。約35名。 ●朝五ツ～夜四ツ半	9／24 9 歌④ ◎？ ○御隠居様母子、外孫。4名。 ●暮過ぎ～夜九ツ過ぎ ・お部屋様（男物）	9／27 10 操⑥ ◎久世大和守振舞 ○大和守父子、能登守と妻等、左京夫妻一家、等。約15、16名。 ●朝五ツ～夜四ツ →御隠居様（屋形に付み）より伝礼	10／4 11 操⑦（報酬） ---------- 歌⑤（報酬）12		3/6 参府	5/5 系図確定， 近衛家より今月始出船の下向， 近衛ノ到着と称す		
延宝6 1678	1/19 駿河台火消役	6/9 帰国							
延宝7 1679 当34歳 若11歳	5／7 13 歌⑥ ◎見物事 ○御隠居様と娘たち、内外孫たち、左京夫妻一家、文化人他。約20名。 ●朝四ツ過ぎ～夜七ツ半	5／13 14 歌⑦ ◎振舞 ○大名、武家、文化人等、御隠居様母子。約15名。 ●朝四ツ過ぎ（客入来）以降～夜七ツ半	5／16 15 歌⑧（報酬） お部屋様（男物）	5／29 16 火事		3/9 参府	1/1 近衛家にて御礼の系図，江戸邸へとどく	・この年，系図関係の資料（略）	
延宝8 1680 当35歳 若12歳	2／9 17 歌⑨ ◎？ ○能登守の妻子、酒井右京妻他女性客、文化人、当主一家。約18名。 ●朝五ツ過ぎ（客入来）以降～？	3／11 18 歌⑩ ◎？ ○出雲守夫妻、能登守の妻子、他、当主一家。約12名。 ●？～？ ↑御隠居様お部屋様（男物）	3／16 19 歌⑪ ◎？ ○大奥女中他、文化人、御隠居様、内孫等。約10名。 ●朝四ツ過ぎ（客入来）以降～？ ・御前 P321, NO7	3／25 20 歌⑫（報酬）	4／16 21 歌⑬ ◎見物事 ○左京、西尾兄弟、武家、文化人等。約8名（男客のみ）。 ●朝四ツ～夜五ツ半	5／4 22 歌⑭（報酬）	3/1 系図の礼白銀100枚他を近衛家へ 3/2 大老酒井忠清ふるまい	8/2 信政・吉子，家綱の遺物を相続す 8/31 吉子，信重と別る（～寛保9） 閏8/22 吉子，「家綱」に湯す ※ e8.5.8 家綱，没 ※ e8.8.23 綱吉の将軍宣下	9/1 帰国の礼の賞 9/7 帰国

（上流目録・勝内表 1）

⑥

天和1	3/3 参府								
1682 2	5/21 帰国	11/22 七ツ雷鳴、深 (90才)		12/28 おヒメ様					
1683 3	3/7 参府	5/1 主殿(42才) 那須家へ入る							
貞享1	3/31 帰国	12/25 若子(16才)、堤五位下出羽守に							
1685 2	3/7 参府	7/19 若子、婚約(松平忠尚女)		9/11 結納		9/26 素行、没			
1686 3	2/8 吟度平度3(『業歴公記』4月日条)			4/27 聖林院 没	7/30 帰国				
1687 4	3/18 参府	6/20 鬼出院、没	8/26 ラー(主殿、16才) 那須家、相続	10/14 ラー、采地没収、信政に預けられ、弟前と蟄居		10/14 那須家の一件に連座して、南内			
元禄1 1688(貞享5)	4/17 南内を免ぜらる	7/28 本所二ツ目に邸地を拝領	(8月 神田邸、習上げ)	9/6 神姫伊織、没 ↳92		9/11 本所邸へうつる	12月 若子、元服(20才)	p31.9.6	
元禄2 1689	在府中		7/27～12/27 矢作結幸出奔につき逼塞					• この年、伊織、傳助急死により、采地千石召上げ、うち五百石は信政に預けられる	
元禄3 1690 当45歳 若22歳	2/11 23 操⑧ ◎? ○清昌院、長寿院、西尾一家、武家、文化人等。20名。 ●?～? ※別帳アリ	4/2 24 操⑨ ◎佐竹修理大夫招請 ○佐竹、武家、西尾一家、松浦等。22名(男客のみ)。 ●朝五ツ半～夜四ツ ※別帳アリ	4/11 25 操⑩(報酬)	5/19 26 操⑪ ◎? ○小野助九郎、西尾一家、町年寄他。8名(男客のみ)。 ●昼八ツ半頃～夜五ツ過ぎ	5/20 27 操⑫(報酬) ⑭ お部屋様付家臣(見16)		8/18 帰国		
元禄4 1691	3/15 参府	8/12 本所火消役	12/11 若子、婚						
元禄5 1692 当47歳 若24歳	1/~~8~~9 28 歌⑮ ◎若殿夫妻の年始による力 ○若殿夫妻、当主等、医者たち他。8名。 ●朝四ツ半(平蔵妻入来)以降～?	1/10 29 歌⑯(報酬)	3/18 30 歌⑰ ◎見物事 ○清昌院、長寿院、若殿夫妻等、幸、木屋。7名。 ●昼(役者昼食)以降～?	3/19 31 歌⑱(報酬)		4/4 久祥院、没	8/6 帰国		

御新造様

御袋様 (P386下) NO10

元禄6 1693 当48歳 若25歳	5／4 32 歌⑲ 準備 5/13 参府 5/23 本所火消役	5／9 33 歌⑳ 準備 ・御新造様	5／10 34 歌㉑ ◎見物事 ○町野、主税、若殿妻、清昌院、他。6名。 ●朝四ツ～夜五ツ過ぎ	5／11 35 歌㉒(報酬) 御新造様 中屋敷奥様	5／21 36 歌㉓ ◎清昌院、若殿妻の入来 ○上記の他、町野、主税、開益、幸。6名。 ●朝四ツ～？	5／22 37 歌㉔(報酬)	11／18 38 操⑬ ◎？ ○清昌院、長寿院、川勝、町年寄、幸、開益。6名。 ●朝四ツ過ぎ～夜五ツ	11／21 39 操⑭(報酬) 9/6 詰田世良より神地一つ手代を任ずる	12／18 40 操⑮ 小山常有へオットセイの肉を下賜
元禄7 1694 当49歳 若26歳	2／11 41 歌㉕ 準備 2/15 綱吉の講演指南 ↳No46	2／20 42 歌㉖ 準備 ・御新造様	2／21 43 歌㉗ ◎見物事 (若殿妻の、出産後赤子と初入来) ○若殿一家、町野、小野、開益、町年寄、幸、他。8名。 ●朝五ツ過ぎ(若殿妻ら入来)以降～？	2／晦 44 操⑯ 準備 中屋敷奥様 御新造様 幸姫 大奥様 (御新造様へお祝の品) P376下 No28	3／7 45 操⑰ 準備 御新造様 奥様 P397下 No4	3／11 46 操⑱ ◎当主の御講談拝聞祝儀 → 3/5 ○若殿妻の父、武家、幸、他、清昌院、若殿妻等女性客、家老娘等。約30名。 ●？～？ ※別帳・客付帳アリ	4／21 47 歌㉘ ◎若殿妻入来による力 ○家臣の他は若殿妻のみ ●？～？	4／25 48 歌㉙(報酬) 御新造様	5/2 帰国
元禄8 1695 当50歳 若27歳	6／11 49 歌㉚ ◎参府後、清昌院、長寿院、初入来 ○上記他、若殿兄弟、采女兄弟、町野、僧侶、小野、幸、他。23名力。 ●朝四ツ～夜五ツ半 大奥 P409上 No29	8／14 50 歌㉛ ※〔磐麻呂誕生〕(7/28) 中屋敷奥様 (お安子) P405上, No26 奥様 P405上, No29 大奥様 (政姫へ性子) P406下, No65	2/8 江戸大火 四谷仁馬町より出火、千万400余軒を焼	3/18 参府	9/1 凶作につき検約令 9/3 凶作を幕府に報告 10/10 月給をもらわる者加わる始める 10/7 知行米削減	10/9 落土の報、半減、町医・職人200人に暇 11/3 幕府より(凶作)見舞として、米3万俵分600両を賞与する	12/5 野坂の者数人に暇	12/21 上野、焼	・この年、凶作による餓死者3万人余という(天祐記録) ・天祐が年貢徴収で落土統計1930人、内54.9%が暇となる
元禄9 1696	1月 疫病流行、死者少し、飢死者、盗賊 (風説)		4月・5月・落土に暇(風説)		6/2 帰国	8月、落土に暇(風説)			

(上演月日・時間表 2)

元禄10 1697 当52歳 若29歳	5／21 51 歌㉜ ◎見物事（若殿妻入来の御慰めカ） ○当主一家、若殿夫妻、祈禱の僧侶、采女兄弟、他、約14、15名。 ●朝五ツ（祈禱終了）以降～夜五ツ半過ぎ ※別帳アリ	5／22 52 歌㉝ ※家臣、昨日の見物の礼 （中屋敷奥様・奥様） （大奥様） P407, NO12 〔見物〕	11／23 53 歌㉞ ◎見物事 ○若殿夫妻、長寿院、采女、与一、他、僧侶。7名。 ●朝四ツ頃～夜五ツ頃 ・（大奥様） （お菜子） P412下, NO12	（中屋敷）奥様		3/20（38.11.3） 幕府より借用の求る万両（8000両）のうち、2800両を返納		3/19 多病	3/20 江戸大洪水
元禄11 1698 当53歳 若30歳	12／18 54 歌㉟ 鳴物停止赦免		5/6 帰国	5/23 信政預りの500石を采女に与える ↑g2		9/6 勅諚焼、 神宗の中御 類焼			・この年 5月 洪水 6月、7月 いなしな大水
元禄12 1699 当54歳 若31歳 右 5才	5／3 55 歌㊱・操⑲ 歌舞伎上演予定を操りに変更 ・狂言師の儀 法度	5／10 56 操⑳ 準備／屋形様 奥様・名前名 （大奥様） （見物）P417上 NO1・P417下 NO4 ・行医 P417上, NO1	5／11 57 操㉑ ◎見物事 ○当主夫妻、若殿一家、長寿院、与一、采女兄弟、僧侶、武家、文化人等。24名。 ●？～夜五ツ前	5／21 58 歌㊲ ◎見物事 ○当主夫妻、若殿一家、長寿院、与一、采女。8名。 ●朝四ツ～夜五ツ半過ぎ	10／1 59 歌㊳ 準備 屋形様 奥様・名前名 （大奥様）（見物） P420下, NO3	10／2 60 歌㊴ ◎御慰めの見物事 ○町野、采女父娘、主税等、大蔵、他、当主夫妻、若殿妻、長寿院。13名カ。 ●朝五ツ半過ぎ～夜五ツ半 （大奥様） （見物）P421上 NO2 奥様		3/13 多病	5/18 吉子、初帰国

元禄13 1700 当55歳 若32歳	1／23 61 歌㊵ 予約	1／30 62 歌㊶ 準備	2／1 63 歌㊷ 準備	2／2 64 歌㊸ ◎見物事 ○小野、采女、他、若殿(妻)、長寿院。6名カ。 ●朝四ツ過ぎ～夜五ツ 奥様 「大奥様」	3／11 65 歌㊹ ◎見物事 ○僧侶、小野、他、若殿(妻)、長寿院、采女兄弟。11名。 ●？～夜五ツ過ぎ 奥様		3/1 ある、参府 4/20 家光50回忌、 5/8 家綱21回忌、 これらにより、大赦行われ、 与一に恩赦 ↑J4	5/20 伺政・ある 与一、 出家に過 5/ 吉子、工作家改称	9/1 帰国
元禄14 1701 当56歳 若33歳	12／21 66 歌㊺ ◎見物事 ○？ ●？～夜九ツ半 ※委細別帳		5/5 参府 7/28 警戒8、流行始	12/1 与一、細ちに再持 12/24 与一、幕府より知らせ 12/29 与一、4石					・3/14 浅野長矩切腹
元禄15 1702 当57歳 若34歳 若 ま	3／6 67 歌㊻ ◎見物事 ○僧侶、小野、若殿(家)、与一、采女兄弟。12名カ ●？～夜五ツ半頃 ※別帳アリ	大奥様より仰せつけ 奥様・若れ ・厚形様 P535ヲ No8 大奥様 P434, No2 P433 No7		5/6 帰国	7/9 花火見(国元) 98, 99				・この年 飢饉

(上海月日・時間表 3 ㊤)

⑧

第五回
資料3　(H16.2.25)

津軽家の女性

- 不卯姫（信政正室；平蔵・主殿の生母）　：寛文13（延宝1）5.29　没
- 桂林院（信政嫡母）→［御陰居様］　：貞享3.4.27　没
- 泉光院（不卯姫生母 or 祖母）　：貞享4.6.20　没（86才）
- 久祥院（信政生母）※在，国表　：元禄5.4.4　没

＊

- お部屋様（信政，子寿世の生母）

延宝3.12.11（NO.4）　← 桂林院も
4.2.12（NO6）　← 同上
5.9.24（NO9）　← 御陰居様も
7.5.7（NO13）　← 同上　※入府説
7.5.13（NO14）　← 同上　※大奥代，大勢
8.2.9（NO17）　← 同上
8.3.11（NO18）　← 同上

※ 3.5.19（NO26）「御部屋様仕」宿屋の見物

- 桂林院［御陰居様］

NO1，NO2
NO4
NO5　※能登守ふるまい
NO6
} 桂林院

NO8　※大奥女中，大勢
NO9
NO10（御礼の記事）※大和守ふるまい
NO13・NO14　※伝え
NO17・NO18　※伝え
NO19

※ 貞享3.2.8条（『基準公記』）「今度平産」

- 御袋様［お部屋様］

○　元禄5.1.9（NO28）
ナシ　5.3.18（NO30）
ナシ　6.5.9（NO33）
ナシ　6.5.10（NO34）
ナシ　6.5.21（NO36）

- 平蔵正室　※94.12.11 姫

御許様
同上
同上　（メイン・ケストの1人）
中屋敷奥様
御許様　（メイン・ケストの1人）

③－1

・大奥様・奥様		・平成正宝（77.3）	
ナシ	7. 2. 20 (NO42)	御新造様	※NO43の準備
大奥様→※	7. 2. 21 (NO43)	中屋敷奥様・御新造様（幸姫出産後、初午始）	※お祝進上のこと
奥様	7. 3. 11 (NO46)	御新造様	※杉戸の清涼持参祝
ナシ	7. 4. 21 (NO47)	御新造様（メイン・ゲスト）	
大奥様→※※	8. 6. 11 (NO49)	中屋敷奥様→※※※	※ 春分後はじめて 清涼院・長寿院、来和 ※※ 政知院へ帰る下男のこと ※※※ お菓子進上のこと ㊐ 8.7.28 磐座、逝去
奥様			
大奥様	10. 5. 21 (NO51)	中屋敷奥様・奥様	
大奥様→※	10. 11. 23 (NO53)	（中屋敷）奥様	※「大奥様」はお菓子進上のこと
大奥様	12. 5. 11 (NO57)	奥様	
〃	12. 5. 21 (NO58)	〃	
〃	12. 10. 2 (NO60)	〃	
「大奥様」→※	13. 2. 2 (NO64)	〃	※「大奥様御料理方」 「大奥様へ御奥様…御為入候」
「大奥様」→※	13. 3. 11 (NO65)	〃	※「大奥様御料理見積」
大奥様	15. 3. 6 (NO67)	〃	※ 大奥様の仰せ出し

③－2